

教室の隅でひとり、することもなく  
しゃがんでいる彼のそばに座る。  
週明けには転校してしまう子を送る  
会なのになんか前のように彼は放つ  
ておかれている。  
別にここに来なくていいのに。  
こっちを見もしないで言う。  
子分は親分の側にいるもんでしょ。  
僕の声に泣いている気配。忘れない  
よ。

いくつ制服をぼろぼろにされたのか、  
もう教えるのはやめたので覚えてい  
ない。  
昨日殴られた鳩尾と、今日切られた  
太ももが鈍く痛む。  
歩いて帰れるかな。  
このままでは電車に乗ることはでき  
ない。迎えに来てもらわねばもい  
かない。  
どうせならいつそ、とも思ってたがそ  
れは叶わなかった。

誰も見ていないのをいいことに僕た  
ちははじめて並んで座ってくつつい  
てテレビで映画を見てる。  
「これさ、」  
うん、でも今はなにと言わないで。  
明日になったらまた別のところで暮  
らすんだよ。このまま忘れてもいい  
から。  
テレビの中の二人のように、熱い日  
々も遠い約束もできないけど。

なんでもない階段の踊り場、大きな  
窓のブラインドにスライズされた光  
が見える。  
廊下の向こうから、広場から聞こえ  
る子供の歓声。  
いくら降りても一階につかず、私は  
永遠に階段を下りつづける。  
目紛しく変わる階数表示、すれ違っ  
た人の疲れきった顔。  
彼らもまた、目的階につかないのだ。

土曜日の朝が好きだった。半日学校  
を我慢したらひとりになれるからだ。  
誰にも追いかけてられない場所で本を  
読む。走る、遊ぶ、眠る。  
真上の日差しが角度を落としてきて  
赤く変わるころ、楽しかった一日は  
終わる。  
日曜日は執行を待つ死刑囚に変わる。  
来週まであと7日。もう持たないよ。

また君か。  
駅員は呆れたように僕を見る。  
循環線を何周もしているのを咎めら  
れている。というか人の少ない昼間  
に一人ならすぐにバシるか。  
学校は？ 質問には答えない。  
駅員は学生証を見てもどこかに電話し  
ている。  
たぶん誰も来ないと思うよ。廃棄処  
分になったからね。  
それすら言えない。

今日みたいに寒い日は君と歩いた大  
通りのことを思い出す。  
僕があげたコートを着た君と君がく  
れたマフラーをした僕はふれるかど  
うかの距離で並んで歩いたのだった。  
思いきつて手をとると、君はうつむ  
いてそのまま黙っていた。  
怒っているのかと離そうとすると、  
今度は強く手を握った。

指定された住所に荷物を持っていく。  
人のいない、海が見える高台にハン  
コ宅配ボックス。  
無人受取は初めてで料金も不  
満な光景だ。  
ハンコを買いボックスに入れて入れ  
へ。ゴトリと息を吐き出しては  
放物線を描いた。  
品目を見る。  
遺骨……？  
依頼人を思い出し手首を握る。

# 終わりの気配

添嶋文庫

それでは今日をおまじして、私、解  
散いたします。ありがとうございます。  
散りました。  
がくりと身体は崩れ、手、足、頭、  
臓器、細胞に至るまで小さく小さく  
分かれてどこかに行ってしまった。  
ただ配だけ先行先を決められず、  
好きだった人の傍に居るまで。  
時間とともに忘れ去られるまで。

週末の夜中に、大学から下宿に帰る  
時によく使う、中学の裏手の川沿い  
の細い道で曲に合わせて姿な歩きか  
たをするのが好きだった。  
誰も見ていないのをいことにな、な  
にかとバランスをとるために必要な  
行為だったのかもしれない。  
と、今では思う。気が狂う寸前みた  
いな毎日だったんだ。

先生、さようなら。  
みなさん、さようなら。  
また明日ね。  
明日はなににして遊ぼうか。  
そんな相談。明日の授業の用意。  
なにかあつてもなにもなくともいっ  
もの通りで、変わることなく、み  
テストしようかと思っただけ、み  
んなで裏の公園まで観察がてら散歩  
かな。

たいだいま。扉を開ける。  
ひんやりとした空気がしゃがんだ身  
体に当たる。ぼんやりとした光。コ  
ンプレッサの動作音。返事は、ない。  
少しずつ形の変わっていくのを止め  
られなくて、悲しい。好きだったの  
に。  
さわると崩れそうなのを身体。簡単  
に息が止まってしまうなんて。嘘み  
いだ。

自分ひとり違う学校になるとまだ言  
えてない。引越したらなにかもかく私  
立に行くだけだからなにかもかく  
おぼさんに聞いたよ。  
健太がこっそり耳打ちする。  
いつでも遊べるじゃん。  
うん。だけどそれがいつか嘘になる  
ことも知っている。

たいだいま。扉を開ける。  
ひんやりとした空気がしゃがんだ身  
体に当たる。ぼんやりとした光。コ  
ンプレッサの動作音。返事は、ない。  
少しずつ形の変わっていくのを止め  
られなくて、悲しい。好きだったの  
に。  
さわると崩れそうなのを身体。簡単  
に息が止まってしまうなんて。嘘み  
いだ。



添嶋文庫「終わりの気配」  
二〇一五年三月一五日 発行  
著者 添嶋 護  
発行人 言葉の工房  
無断転載はご遠慮ください。  
QRコード (添嶋少年)  
literarya-ce@litttestar.jp  
literary-ace@ko.litttestar.jp